

「改革派教会に加えられて」

山梨栄光教会 関口 康

今から半年前のことです。今年の2月8日付で、上福岡教会の門脇献一長老から、わたし宛に1通の電子メールが届きました。その内容は、8月29日(今日のことで)に東部中会連合長老会が行われるので、その場所で関口が長老方の前で発題をするように、という御依頼でした。

門脇長老のメールの内容を(無断で)少し御紹介しますと、「先だつての連合長老会の役員会で、改革派教会に移ってこられた関口先生のお話を聞く機会があれば、ということになり」とありました。そして、「私どもとしましては、先生の目から見ての、改革派、あるいは東部中会の良い点、また、足りない点などを忌憚無く話していただければと考えております。私を含め、改革派しか知らない者には見えない点をご指摘いただければ幸いです」〔傍点関口〕とのことでした。

ここまで読みまして、さて困ったな、と思いました。といいますのは、まったく正直に申し上げて、わたしは、門脇長老がメールに書いてくださったようなニュアンスのお話をするにはふさわしくない者である、と自覚しているからです。

門脇長老は、「改革派、あるいは東部中会の良い点、また、足りない点などを忌憚無く…」と書いてくださいました。しかし、今のわたしは、改革派教会の皆さんの行き方に対して、ほとんど全く何の不満も持っておりません。批判らしいことも、一切感じていないのです。

わたしは、1996年12月に福岡県北九州市八幡にある教団の教会を辞任して、1997年1月から1998年6月まで神戸改革派神学校で学ぶことが許されました。北九州の教会には、たったの10ヶ月足らずしか居ませんでした。謎の10ヶ月!その間にいったい何があったのかということをお話ししておく必要があるだろうと思います。

じつを言いますと、わたしはその教会に赴任する以前、高知県にある教会の牧師として働いていましたときすでに、教団を離脱して改革派教会に加入することを、非常にはっきりと決心していたのです。そんな思いを抱いたまま、しかし、いろいろなシガラミがありまして、踏ん切りが付かなくて、ついに次の教団の教会に赴任してしまったのです。案の

定、わたしは、その新しい教会で牧師としての働きを続けることに、すぐに困難を覚えるようになりました。だって、心の中はすでに教団の「外」にありながら、教団の「内」にいるのですから。そんな状態で、教団の牧師として働くことは、全く不可能なことでした。その教会の皆さんは、わたしたち牧師家族に対して本当に良くしてくださいました。だからこそ、ますます、わたしは、この人々を心の中であざむいている、という思いにとらわれるようになり、非常に強い良心の呵責を覚えるようになって、実際的にも仕事が成り立たなくなってしまうのです。それで、わたしは、その教会の役員みんなの前で素直に頭を下げ、「ごめんなさい。わたしの心は改革派教会の中にあります。もはやここでこれ以上働きを続けることはできません」と謝罪し、辞任を認めてもらいました。

その教会を10ヶ月足らずで辞めるという決意をしたときに、終始わたしに対して協力的であった役員さんが、わたしの耳元で「先生の経歴にキズが付きますよ」と、おそらく善意でささやいてくれたりしました。また、わたしは、北九州のその教会から、年令的にはもったいないくらい破格の待遇を受けていました。また、わたしとその教会の方々とのあいだには、個人的な意味でのトラブルは何もありませんでした。まさに、この世的な価値判断の基準からいえば、わたしは、その教会に留まり続けるかぎり、とても豊かな安定した生活が約束されていたように思います。ところが、わたしは、それらのものをすべて捨てても良いと思えた。すべてを失っても良いと思えた。それほどまでに、わたしの目に移る改革派教会の皆さんの姿は、輝いて見えたのです。

ところが...、そのようにして飛び込んだ神戸改革派神学校での1年3ヶ月のあいだ、改革派の皆さんから、いろいろと声をかけていただく内容がどのようなものだったかと言えば、「改革派にあまり期待しすぎないでね!」とか、「改革派に問題があったら、どんどん言ってくださいね!」というようなことばかりで、そういう話を(とても明るい声で)教会の長老さんからも、神学校の先生からも聞かされるのです。改革派に来たばかりのわたしの顔が、よっぽど幸せそうに見えたのでしょう。なんとかして、今のうちに、少し熱を冷ましておかなければ危ないと思われたのか、わたしの頭の上から水をぶっかけるようなことばかりおっしやるのです。そういう言葉を聞きながら、わたしは、改革派の方々というのは、何だかホントに謙遜で、とても慎重な性格の方々の集まりなんだな、と思ってしまふ、そういう人間なのです。

そういうわけでして、わたしとしては、こういうことを申し上げるためならば、いくら

でも時間をいただいて、お話しすることができるのです。が、しかし、門脇長老がくださったメールには、どうもこれだけでは済まない、という感じのことが書かれてあったわけです。「改革派教会の足りない点を忌憚なく」と…。

それで、どうしようかな、と考え込んでしましまして、ふと思いついたことは、次のことです。そうだ、わたしは今のうちに、新入りで右も左も分からないうちに、皆さんにいくつかのお願いを出しておこう、ということでした。批判、ではありません。要求、というの、かなりニュアンスが違います。あくまでも、お願いであり、しかも、とってもやさやかなお願いです。

* * * *

それは、まず第一に、これからの時代、21世紀という時代は改革派の皆さんの出番である、という歴史の流れというものを、どうか強く自覚していただいて、とくにこの日本の中で、いろいろな機会を捉えて、あるいは文書を通して、「外向きに」、改革派教会をどんどんアピールしていただきたい、ということです。

やや出すぎた言い方もかもしれません。しかしなお、どうしても言わずにおれないことは、改革派の皆さんは、やっぱりなんだかちょっと周囲に対して遠慮しすぎのところがあるのでは、と思うことが時々あります。他と比較するような言い方はできるだけしたくないのですが、たとえば、教団の牧師たちが、あまり大した内容もないのに、あれほどたくさん書物や雑誌論文を、堂々と出版して行くのですが、最近の改革派の先生たちは、あまり本を書いておられないのは、なぜでしょうか。大会や中会が出しているパンフレット類はたくさん出されているようですが、これらはあくまでも内部文書です。わたしが願っているのは、外向けに出される文書です。あとで少し触れますが、わたしが教団にいた頃に改革派教会の存在を知ることができたのは、若干の生きた人間的触れ合いもありましたが、それ以外は、ただ文書を通して、という手段によるほかにはなかったわけです。

岡田先生は、たくさん文書を書かれた方であると思います。そのため、今でもキリスト教書店の改革派コーナーに並ぶ改革派の本といえば、まず目に止まるのは岡田先生の本です。まず岡田先生の本がどかんと真ん中に置かれていて、他の諸々の本が並んでいるという感じに見えます。それを見ながら、改革派教会の外側にいる人々が何を考えるか、お分

かりでしょうか。おそらく、岡田先生という方は、今も改革派教会の中で、元気に生きて活動しておられるに違いない、と信じていると思います。諸外国の教科書で、日本の国が、未だにフジヤマ、ゲイシャの世界であると紹介されているらしい、と聞くのと似たことが言えると思います。情報が外向けに発信されないかぎり、外側の人たちは何も知ることができないのです。

教団の中で務めた最後の教会での話です。わたしがそこを辞めて、神戸改革派神学校に編入させていただく、というときに、当然、教会の役員たち（「長老」と称していました）には、きちんと事情説明をしなければならないわけです。「じつは、日本キリスト改革派教会というところに行きたいのです...」。しかし、その教会の役員の中で「改革派教会」の名前を知っている人は、残念ながら一人もいませんでした。その教会は、教団の前は旧日本基督教会に属していた教会で、プロテスタントでは九州全体でも、比較的古いほうに属するところでした。その中の長老格の人たちは、何十年も役員をしてこられたという方もいましたし、その地域のキリスト教主義学校の理事をしている方とか、いろんな超教派の集まりなどの責任を負うたりしている方たちが、少なからずいる教会でした。しかし、「改革派」の名前を聞いたことがあるという人は、一人もいませんでした。同じ市内には、「日本キリスト改革派教会」の教会が「ない」わけではないのです。しかし知られていません。外向きに、つまりクリスチャンでない人たちに知られていない、というのなら、問題にするようなことはありませんが、そういう話ではないのです。改革派の方々は、超教派の交わりなどにはあまり顔を出されていないのでしょうか。自分たちとは違う考えの人たちと同席し、長時間にわたって話を聞かされる、ということに苦痛を感じる、ということは、いろんな教派がまぜこぜになって出来た教団にいたわたしが、いちばんよく知っています。しかしそのような交わりに入らないかぎり、クリスチャンの中においてさえ名前さえ覚えられていない教会になってしまうのです。

イヤでも何でも、腹が立っても、（からだ中がむずがゆくなっても...）改革派の方々は、超教派のクリスチャン団体に、どんどん顔を出していただきたいと願っております。とくに、地方都市の開拓伝道にふさわしいのは、「口八丁、手八丁」で、とにかく腰が軽く、いろんなところに顔を出し、口を出し、どこにもかしこにも「改革派」の印を付けて行くようなやり方で働いてくださる方がよいと、わたしは思います。

第二に、わたしの願いは、どうか、改革派教会はできるかぎりの「一致」を保っていたきたい、あまり内輪もめのようなことで時間を取られすぎないでほしい、ということです。

こんなことは、言わずもがなのことです。わたしは、まだ来たばかりの新入りですので、改革派教会の内部にどういう問題があって、どこでどんなもめごとがあるとか、どの先生とどの先生とは仲が悪いとか、そういう話はほとんど何も聞かされておられませんし、興味もありません。そんな内部のもめごとに時間を取られている場合ではない、と思います。

このこととは直接的に関係ある話ではないかもしれませんが、わたしは、この改革派教会にまいりまして、一度だけ、なんだか聞いていて、とっても辛くなるような言葉を聞きました。たった一度だけ、ある牧師さんからです。

「改革派教会は、今から 50 年前、あのリベラルな信仰思想を持つ教団から離脱して出来た教派である。だから、もし今、この改革派教会がリベラルになったら、わたしはこの教派を離脱するのみである。」

こういう考え方を持っておられる方がこの中におられないことを信じて申しますが、これは非常に間違った歴史的認識である、とわたしは確信しております。こんな話を引き合いに出すこと自体、皆さんにはやや不愉快に思われるかもしれません。しかし、なぜ今ここでわたしがこの点を問題にしなければならないかと言えば、日本キリスト教団と改革派教会との歴史的関係ということが俎上に上がってくるときにはいつも、わたしの思いの中では、自分自身の採った行動と無関係ではなくなってしまうからです。

わたしは、教団にいる頃に、日本キリスト改革派教会の、とくに創立者たちの書かれた文章をずいぶん繰り返し読ませていただきました。わたしが最初に卒業した神学校は東京神学大学であり、卒業後最初に赴任した教会は、高知県南国市にある日本キリスト教団南国教会という教会でした。そこにわたしは 1990 年 4 月から 1996 年 3 月まで 6 年間おりました。わたしは、その教会に約 30 年前から牧師として働いておられた鈴木實先生という方の働きを助けるための「副牧師」として赴任いたしました。やがて分かったことは、わたしの上司である鈴木先生の奥様である純さんという方が、岡田稔先生の娘さんであったと

いうことでした。そんなことも知らずに、赴任したわけです。赴任後まもなく、その純さんからわたしに、「父が書いた本です」と言ってプレゼントしていただいたのが、あの『改革派教理学教本』でした。その他にも、田中剛二先生の著作集であるとか、聖恵授産所から出ているパンフレット類、説教集などは、全部読みました。あるいは、いろいろな（ややあやしい）ルートから、大会の議事録とか、中会の委員会が出しているいろんなパンフレットとかを手に入れては、入念に内容を読ませていただいたりしていました。おそらくわたしはその頃、一種のマニア的コレクターであったのかもしれませんが（笑）。

それはともかく、わたしは、この改革派教会の創立者たちの文章を、何度なく読み返しながら感じていたことは、この方々は、日本キリスト教団というリベラルな教会から自分たちは「離脱」するのだ、そして教団よりもリベラルでなく、教団よりも保守的な教派を、教団に対する対抗勢力として作るのだ、という意識など、ほとんど全く持っておられなかったに違いない、ということです。そんなこと、つまり教団がリベラルであるかどうかというようなことは、言ってみれば、ほとんど自明のことであって、そんなことは問題にする価値もないという感じで、全く眼中になかったのではないかと、思いました（このあたり、やや乱暴な言い方であることを、お許しください）。

そして、改革派の創立者たちがこの教会を作るときの思いは何であったかと言えば、それはひたすら前向きなものであったのではないかと、ということです。あれでなくこれ、とか、何かを批判するための何かとか、何かと対抗するための何か、というような、単なる「対立」の図式だけでこの教派ができたのではなく、むしろあくまでもどこまでも肯定的で、前向きで、明るい動機からできたものではないかとわたしは、創立者の皆さんの文章を読みながら、感じていたのです。

ですから、わたしは、「もし改革派がリベラルになったら、改革派を離脱するのみ。それが改革派教会の創立者の立場である」というような、なんだか一見分かりやすい「三段論法」のように語られる考えに、ついていくことができないのです。

そして、要するにここでわたしが皆さんにお願いしたいことは、改革派教会はできるかぎりの一致を保っていただきたい、内輪もめなどで内部消費をしないでいただきたい、ということです。

* * * *

わたしの第三の願いは、改革派教会は、いつまでも「改革派(は)教会」でありつづけてほしい、ということです。

わたしは、「改革派教会」という、この名前が大好きです。この名前に憧れて、仲間に入れていただく気になった、と言っても決して過言ではありません。とくに、「派」というこの字が、わたしは大好きなのです。この「派」の字が付いていることに意義を感じるのです。

なぜそれほどまでに、この名前にコダワリを感じているか、ということについては、少し説明する必要があると思います。

わたしが、この「派」という字から受けるイメージは、日本人の多くが、まずはもっとも警戒する言葉の一つではないか、ということです。御存知の方がいらっしゃれば教えていただきたいのですが、今の日本の中で「改革」とか「派」という言葉を、自分の会社の名称に付けているところがあるのでしょうか。わたしは知りません。どちらかというと、不吉というか、悪いイメージでとらえられることが多い字ではないでしょうか。

昨年 11 月、山梨栄光教会は、もとあった甲府市から移転して、中巨摩郡敷島町に新会堂を建てました。引っ越しが終わった日、教会の看板の前に自転車を止めて、そこに書いてあることをじっと見つめ、メモ帳を取り出して何やら書いている人がいました。よく見ると近くの交番のお巡りさんでした。わたしが出て行きますと、小太りで赤ら顔のお巡りさんが下のほうからじろっとこちらをニラミつけ、「失礼ですが」とわたし相手に職務質問をはじめたのです。そして「この『改革派』っていうのは何ですか。あなたがたは、いったい何を『改革』しようっていうんですか」と来たわけです。そこでわたしは、改革派っていうのはこれこれ、こういう意味で、決してアヤシイものではございません、と 30 分以上、その場で説明させられることになりました。そして、ようやく納得してくれて、わたしを解放してくれました。実際問題として、この看板は、多くの人々から、かなりアヤシイ目で見られていることは、たしかだと思えます。

じつは、わたし自身もかつて、皆さんのことを、そういう目をもって見ていたから、よく分かります。かつて、といっても中学生・高校生の頃の話ですが。

わたしは、中学・高校の頃岡山県岡山市におりましたが、家から約 10 キロ離れた学校に、

毎日自転車通学をしていました。その道の途中に、岡山教会がありました。御存知の方も多と思いますが、岡山教会は岡山市のど真ん中、後樂園や岡山城がすぐ近くにある、岡山県人ならばあの場所の持っている価値を知らない人はいない、というくらいに便利な良い場所にあります。しかし、失礼ながら、建物は、その昔、賀川豊彦さんなどが関わって作られた「禁酒会館」と称するボロボロの洋館風の建物の一室をレンタルしているもので、どこから見てもキレイとは言えません。建物がボロボロなのは、岡山教会の責任ではありませんので念のため。しかし、そのボロボロの建物の前に、岡山教会の看板が立っている。そこに「改革派」と書いてある。この建物の前を毎日のように自転車で通りすぎしながら、当時のわたしは、なんだかとっても恐ろしくて、おどろおどろしい教会があるもんだなあ、と感じていたのです。ああ、これが噂に聞く「過激派」のアジトなのかと（けなしているようで、ごめんなさい。当時の無知について、恥さらしをしているだけです）。

もちろん、今のわたしがそんなことを感じているはずはありません。しかし、わたしの言いたいことは、日本人の多くは、そういう感覚を持ってわたしたちの教会の看板を見つめているであろう、ということです。

それで、わたしが考えさせられますことは、いったい、こういう「過激な」名前の看板を出している教会に、何のつながりもなく、なんとなく前を通り過ぎることができず、ふらっと立ち寄って求道を始める、という人がどれくらいいるんだろうな、ということです。わたしの考えでは、皆さんの教会の前に立っている「改革派教会」というこの看板は、わたしたち日本人にとって、ただ何となく、ふらっと立ち寄って、スムーズに入って行けるような看板ではない！と思っているのです。

このわたしたちの看板は、むしろ、他のいろんな教団や教派の中で、「キリスト教とは何か」という根本的な問いを、神学的に、歴史的に、それこそ非常によく勉強して、神様ご自身の御心に少しでも近づきたいと心から願っているが、しかし、彼らの属する教団や教派の中ではどうしても答えが与えられないと感じている人々。正しい信仰を求めたいけれども、牧師の語る説教の内容に躓いたり、人間関係がイヤになったり、神学的な問題を感じたりして、飛び出してくるような人々が、真実を求めてやってくるような場所、それが「改革派教会」という看板が、自ら語っている内容ではないかと、わたしは思うのです。

「改革派教会」の「改革派」の第一の意味は、「聖なる公同教会」の「改革」であるというこの点ではないでしょうか。先ほどのお巡りさんは、わたしに「あなたがたは、いった

「何を改革しようっていうんですか」と問われました。「改革派教会」の意味は「改革された公同教会」(ecclesia catholica reformata)であると語られます。「公同教会」(ecclesia catholica)とは、いわゆるローマ・カトリック教会だけのことではありません。すべてのキリスト教会を包み込む「全体教会」のことを指していると言わなければならないのではないのでしょうか。

もしそうであるとするならば、「改革派教会」は、他の教派の問題に全く首を突っ込まない、他人の問題にはうかつに踏み込むべきではない、踏み込みたくない、ということだけでは済まされない局面を持っていると言わざるを得ないはずです。しつこく言えば、自分の教派の問題で手一杯、他教派のことなど関わりたくもないし、関心もない、というわけには行かないのではないのでしょうか。

「派」という字の中には、全体の中の一つのパートを受け持つ、という言葉の響きがあるように思います。いずれにせよ、わたしたち人間の営みは、すべて、神が御心の中に描いておられる御計画のパートを受け持つ、という面を持っていると考えるときに、この教会の看板につけられています「派」という字が、神の前にある、非常に正直で、ありのままの人間の姿をあらわしている、と感じられてなりません。

わたしとしては、行きがかり上、わたしが、かつて属していた日本キリスト教団の問題を考え続けて行くことが一つの与えられた役割ではないかと感じております。皆さんにもどうか、改革派の「内」の問題だけではなく、「外」の問題を視野に入れて、いろんな事柄に取り組んでいただきたいと思います。

事実、たとえば、今の山梨栄光教会には、教団出身であるが教団につまずいて改革派に來た、という人たちが「続々と」集まってきております。時間もありませんので、今ここで、現在の日本キリスト教団の惨憺たる内情を暴露することは控えておきます。しかし一つだけ申しますと、今はまさに教団が「流動化」しているときです。ですから、皆さんの教会にも、教団からの「難民」がおそらくこれまで以上にたくさん現われると思います。というわけで、(わたしから言うのはへんですが)どうか温かく受け入れていただければ、うれしいです。

御静聴いただき、ありがとうございました。

(1999年8月29日、東部中会連合長老会、東京教会)